

第2回山形県立博物館移転整備に向けた有識者懇談会の開催結果について

1 日 時 令和4年10月14日（金） 10時～12時

2 懇談会出席者

○委員

泉 虎吉〔十世 泉 清吉〕（デジタルクリエイター）、小川 義和（国立科学博物館 調整役）、川勝 節子（株式会社コロン 取締役）、黒田 三佳（人材アカデミーローズレーン 代表）、笹館 郁乃（東北芸術工科大学芸術学部文化財保存修復学科）、佐藤 琴（山形大学附属博物館 学芸研究員）、菅井 昭（山形大学大学院理学研究科）、原田 祐馬（UMA / design farm 代表）、三浦 友加（料理家）、山川 唯美（山形ママコミュニティ mama*jam 代表）、ラーワー ちひろ（絵本作家）

3 会議の概要

事務局から、第1回山形県立博物館移転整備に向けた有識者懇談会の主な意見の状況について説明の上、各委員から意見をお聞きしたのち、意見交換を行った。

【各委員からの意見】

■ A 委員

- ・ 資料1の中で、視点1～8をもっと深掘りした方が良いものについては、それぞれの分野のプロフェッショナルの方との意見交換により現実的な話になると思う。
- ・ 博物館そのものの検討だけでなく、県全体の観光・交通政策などの大きな枠組みの中で検討するのが良い。
- ・ インパクトをいかに数字で見える形で出せるのかということが重要。それは、必ずしも来場者数ということだけではない。見える変化を継続できると良い。
- ・ 博物館の近くにホテル、カフェ、或いは商業施設などがあると地域の活性化につながると思うので、関心を持っている宿泊事業者等と意見交換するのも面白いと思う。

■ B委員

- ・ 前回の意見を資料1、2にまとめていただき、わかりやすく構造化されたと思っている。
- ・ 今後、何のためにやるかという「使命」と誰がどのように支えるのかの「マネジメント」について議論しなければならない。
- ・ 令和4年4月公布で博物館法の改正があった。国際博物館会議（ICOM）が8月末にプラハで開催され、2022年に博物館の定義が変わった。2007年に決定した定義を深掘りするため、2019年、非常にインパクトのある定義が提案されたが合意に至らなかった。その後、オンラインで議論しながら、現在の定義に落ち着いた。多くの賛成を得たようだ。
- ・ 新たな定義のキーワードとしては包摂的な博物館、インクルーシブと言われるもの。多様性、持続可能性、コミュニティの参加などの全体的な課題に対して博物館は対応しなければならない、とされているので、そのことについてもこれから考えていかなければならない。
- ・ 新たな定義では、研究が最初に謳われている。博物館は、まず研究を大事にしなければならない。これからの博物館は、研究機関として位置づけることが重要。
- ・ 学芸員など、人材のあり方も議論する必要がある。山形県の文化が求める人材とはどのような人材か、ということを考える必要がある。
- ・ 包摂的な、つまり、さまざまな多様性のある人が利用でき、地域の持続可能性を促進するような博物館のあり方が大事。さらに、倫理的かつ専門性を持つという事も博物館の特徴である。それは、学術的な専門性だけではなく、経営・教育の専門性など運営面の専門性も持たなくてはいけない。専門性を持って倫理的に取り組んでいくのが重要。また、コミュニティが参加することによって博物館は成長していくと考えている。
- ・ こういう点とこの懇談会の議論はオーバーラップしていると思う。足りないところがあるとすれば、研究、人材、マネジメントの議論だと思う。

■ C委員

- ・ 資料2について、集約していくのはまだ早いと感じている。まずはもっと意見交換をしていきたいと思う。この資料により、博物館移転整備は、多岐にわたるプロジェクトになりそうだと感じている。各部署に関係性がありそうだと見て取れた。
- ・ 少子高齢化と人口減少はこのプロジェクトだけの問題ではない。運営する人員、来館者ともに減少していくことは止められる事象ではない。どうやってプロジェクトを進めていくのが大切。莫大な予算を博物館事業だけに回

すのは難しいと考えられるので、横断型として各部署と一緒に協力することが重要。

- ・ 各部署から人員が出てくることによって、時間の短縮ができてタイムラグをなくすことが出来る。時間をかけ過ぎると時代が変わってしまうため、プロジェクトが進むほど取組みに拍車がかかっていくような運営体制の構築が重要。

■ D 委員

- ・ 山形県に移住してから人生が本当に豊かになった。山形県は魅力的なすばらしいところだと思っている。
- ・ これは、(実物を示して) 近所の子供たちと作った「かてもの」のカードである。全国の博物館、図書館から問い合わせがあり送っている。
- ・ 山形県には民俗学的、歴史的に様々な魅力がある。
- ・ 自身が暮らしたことのあるデンマークでは、ユニバーサル・インクルージブに配慮した、誰でも利用しやすい博物館が当たり前になっている。これからの博物館を考えるとときには、誰にでも活用してもらえるような配慮が必要だと考える。
- ・ 博物館は「ヒト」が作っていくものと考え。スタッフとしての要素、養成の仕方を考えていく事も大切。
- ・ 博物館でこんなことができるの? というように、ときめいたり、閃いたりするようなことがあるという創造的な部分も話し合っていくことが必要。
- ・ これからの博物館にとって、横連携が必要になると考える。博物館の目的として、教育、研究、楽しみなどがあるが、これからは、観光、移住に繋がっていくと考える。
- ・ 博物館の持っているものを研究対象として考えられるように、いろいろな方がアクセスしやすいようにしたら、直接的に研究をしたり、山形での暮らしを考えたり、研究職を求めたりすることにも繋がる。
- ・ さらに、リアルだけでなくデジタルでもアクセスできるということが重要。さまざまな地域や世界、時代を超えてアクセスができる事が興味関心に繋がる。また、アクセスしやすいということをオープンにわかりやすく発信していくことが必要。
- ・ 利用者の足跡、効果をストックしていくが大事。そうすることで、教育現場、高齢者など分野、年代、地域で求められていることが分かるのではないか。

■ E 委員

- ・ 国際博物館会議（ICOM）における博物館の定義が変わって、新たにコミュニティの参加が謳われた。県立博物館なので、山形県に住んでいる方や身近にいる方が学べる、新しい知識を得られる場として重要。
- ・ 山形県内にもまだまだ知らない文化財がたくさんある。地元の方が地域の文化財を大切にしており、神社に奉納された絵馬が航海の安全や豊漁を祈る対象であったり、歴史との繋がりを感じることができる。そういうものを博物館で展示することで、新たな発見や文化財の存在を認知してもらう事につながるのではないかと考える。
- ・ また、絵馬による祈りの文化が漁業振興につながっており、地元の産業、観光に寄与できる。レストランやカフェで地元の食材を取り入れたり、ミュージアムショップで関連品を販売することで、自分の生活に身近に感じられたり、誘客につながるなど、可能性を広げられるのではないかと考える。
- ・ 博物館で働く方が研究しやすい環境づくりが大切。収集している作品を理解している博物館の方が作品の魅力を伝えていく事が重要。

■ F 委員

- ・ 前回の意見をまとめていただきわかりやすくなった。
- ・ 8月3日に山形県南部で大きな水害が発生し、人命や財産が失われた。私は、山形県文化遺産防災ネットワークの代表も務めており、各地に残る未指定の文化財も含め、皆様が大事にしているものを守る活動をボランティアで行っている。
- ・ この資料2の県民が安全安心を実感し、総活躍できる社会づくりに関連して、前回の懇談会で山形にしかないもの（資料）を蓄積し、何か見出してくる専門性の必要性が話し合われた。一方、少子高齢化の影響もあり、それらの資料を地域で守っていくには限界がある。県全体として守っていくことが重要。このことは、山形県文化財保存活用大綱にも謳われている。これは県にしかできないことなので、このような機能も盛り込んでいく事が重要。
- ・ 連携というのは、地域、産業、自治体同士など、さまざまな立場の連携がある。何のために連携するのか、目的がはっきりしていないと連携のための連携になってしまいうまくいかない。
- ・ 新博物館として、県民のために、県にしかできない部分を、専門的な視点で資料研究に基づいてやっていくという、核となる部分をしっかりと構築する必要がある。

■ G委員

- ・ 資料1について、具体的にどういうものがあつたかという事を視点ごとにまとめていただいたのがわかりやすかった。
- ・ ジオパークとの連携ができれば面白い。ジオパークとは、地形とか地質の遺産を中心とした景観だが、博物館が学術的なバックアップを行うことで博物館を知るきっかけになると思う。宮城県には、ジオパークである三陸の国立公園に震災の遺構があり、そのようなものを災害の啓発とか、防災に役立てることが出来る。現場の遺稿や碑、モニュメントなどを野外博物館として調査・研究、教育普及に生かしていければと思う。また、山形県内のジオパークの一つひとつのスポット、ジオサイトをツアーなど観光に魅力的に生かせれば、と思う。
- ・ また、天童市には、ジャガラモガラという風穴がある。岩石が風化して崩れたところから冷風が出てきている場所だが、明治～大正にかけての養蚕などの産業遺産としても見所である。さらに、ジャガラモガラという奇妙な名前に民族的なルーツがある。一つの自然現象から、自然科学的な魅力、産業遺産として、民俗的な魅力を持つものとして、多様な魅力があるものとして、博物館がバックアップしてほしいと思う。
- ・ また、ジオパークに関して、ビジターセンターと連携することで博物館の魅力を宣伝していけると思う。
- ・ 開館までの取組みとしては、道の駅や物産館といったコーナーや駅や空港の一区画を利用した展示などで、開館までのPRをしていくのが良い。実際に道の駅や敷地内に、博物館コーナーが併設されているところもあり、観光や購買にプラスアルファして複合施設的に博物館や資料館を見られるので非常に良いと感じた。
- ・ 博物館の施設を大学の研究などに役立てるのも良い。博物館内に部屋を設けて学会やイベントをすることが出来れば良いと考えた。

■ H委員

- ・ 山形県は、山菜もたくさん各地で採れてとてもおいしいので、全国的にも有名であり、県外からも採取に訪れていて人々の楽しみになっている。山菜マップのようなものを作ったり、山菜採りツアーを誘致したり、採取の際の注意点や昔からの言い伝えなど、面白くてためになることを伝えるのが面白く次世代に伝わりやすい。また、山菜の毒性、注意点、致死量なども学べるパネルなども欲しい。また、保存法などをワークショップ出来る空間を作る事も面白い。
- ・ 鶴岡市は給食の発祥地である。年に一度、江戸時代の食事が給食に出る。

現代の食事のおいしさとはまた違う魅力がありすごく印象的で楽しかった。葉物の漬物を水で戻し塩抜きしたものと干し豆の煮びたしや超辛口の塩漬け鮭、など保存食を上手に活用したメニューは、非常時にも役立ち、食糧難を乗り越えてきた歴史や食育を学ぶ事にも繋がる。郷土料理を楽しめるカフェが博物館にあったら良いと考えている。さらに、ワークショップができる空間があるなど、そこで終わるのではなく、さらに知識を学べたり、体験できる場所を案内したりといった役割を担って欲しい。

- ・ 湯治場で、長期間滞在しながら酒を飲んでいても、決して胃もたれしないような「謎のなます」など、謎めいたものも山形県の魅力である。また、そのような魅力を伝えるにあたり、移動することが困難な高齢者も参加できるようにオンラインツアーを企画したり、事前に宅配で食材を手元に届けて一緒に食べるなど、一体感の持てる取り組みが面白い。
- ・ 合併されて吸収されてしまった町のとても貴重な資料が廃校を利用したコミュニティセンターに収まっている。法令上誰も見ることができず、ただ朽ちていくのを待つといった資料がある。こういったものをお宝発見イベントのように、面白がりながら、でも大事なポイントを伝えながら残していく事ができないか。
- ・ 博物館に、県内に眠る資料や逆に手放す事を検討している資料などを集めて、のみの市や鑑定会などを開催してほしいと考える。博物館側、一般の方がそれぞれ譲りたいものを持ち寄ってフリーマーケットを行う。ものを循環させるSDGsの取組みにつながる。
- ・ ファンの入口をがっちり掴むのが大事。出羽三山に関わっていた時に募金したいと言われることがあった。窓口を作って、クラウドファンディングやボランティアなど、支えてもらう仕組みを作る。さらに、SNSなどで発信しながら、支え手と博物館の関係性をどんどん濃くしていくのが良い。
- ・ ゆるキャラを活用するのも良い。全国各地から集客が見込める。
- ・ 山形には不思議でミステリアスでPRしにくいものがたくさんある。県立博物館の立場で展示したら、意外性があり「引き」になる。
- ・ 関係人口を増やし、来館者のデータも集めて、ご意見、ご助言、アドバイスをいただく事も大事。
- ・ 学芸員にスポットを当てて発信していく事も面白い。熱量が高く、興味深い話をしてくれる方がいる。県内各地の学芸員のトークイベントなどを見てみたい。
- ・ 温暖化により、山形県沿岸でも獲れる魚が変わってきており、南の方の魚が獲れてきている。地元の方も食べ方がわからないためそのまま海に捨てている。時代とともに変遷する食材の使い方などを南方の方と交流しながら学

び、博物館に併設されたカフェで食べるといった事が出来たら面白い。

■ I 委員

- ・ 山形県は、「子育てするなら山形県」という政策を打ち出しているので、親子で楽しめる博物館、大人も子どもも楽しい場所というところはポイントだと考えている。
- ・ 愛称がキーワードになると考える。例えば「チェリハク」のような、愛称を募集して、県民になじみのある場所にしていく事が良いと考える。ゆるキャラも同様だが、アイキャッチになるようなものを同時に作っていくという手法は行政関係の施設では難しい。民間の広報的なブランディングの手法も必要。
- ・ インクルーシブの視点は重要。
- ・ 県民だけではなくて、観光の一つの拠点になるような、山形のことなら何でもわかる場所といったポイントがあると、自分が住んでいる場所を歴史とともに知ったり、教えることができる。
- ・ レストランを併設し、食育の発信場所になっていくことも面白い。
- ・ いろんなものが展示されていて、情報がたくさんある場所という事も大事だが、逆に何も無い部屋に、そのときの旬な情報をプロジェクションマッピングを投影していくような場所があっても面白い。全部がそろっている完璧な場所ではなく、その時代その時に応じたものが展示できるような自由な部屋があっても面白い。

■ J 委員

- ・ 新博物館を作るという事がとてもワクワクする。このことを成し遂げるためには、多くの人を巻き込んでいった方が良い。
- ・ 一般の方々を巻き込むという事も一つのアイデアであり、酒田市のサカタントという商業施設の事例がある。壁に絵を描きに行き、子ども達と作品を作った。開館前のPRにも繋がると思うが、自分たちで作った参加型のシンボルがあると自分事と感じられて良い。
- ・ 目を引く建物と言って県内には思い浮かぶものがない。建物のデザインをコンペティションを開いて決めるとか、ゆるキャラもコンペティションでアイデアを出してもらうなど、人を巻き込んでいく事はすごく良い。
- ・ ミュージアムグッズは大事である。博物館に行ったときに何かしらちよつと買って帰りたいなというのは多くの人があると思う。例えば、縄文の女神のスマホケース、ヤマガタダイカイギュウのぬいぐるみなど。さらにヤマガタダイカイギュウを発見した時の話を絵本にするという事も面白い。

- ・ 民間の施設を併設して、行政機関では難しいことを担ってもらおうという事もできる。ミュージアムグッズがあると、開発や製作に中小企業や地元の事業者が参加できる。
- ・ 教育や研究の場において、子供たちが学校で学んでいること以外にニッチな興味が湧くことがあるが、そのような意欲を満たすことについて学校だけでは対応しきれない。そのようなことに対応することにより、さらに価値のある場所になる。学芸員が学びたい場所への案内役になるという事が周知されていくと、もっと博物館に行き学びを深めることができる。

■ K委員

- ・ 開館までのプロセスが大事だと考えている。一つ目は、意義・定義をきちんと決めていく事を含めたプロセス、二つ目は、どうやって館（やかた）を作っていくのかというプロセスである。自分自身が大事にしていることは、インプットとアクティビティを行き来しながらプロセスを作っていくこと。こういう博物館が出来るといい、というものを作る事とそれがなぜ存在すべきかというアウトカムをちゃんと設定するという事を大事にしている。
- ・ 新たな視点としては、インクルーシブな視点が資料1の視点9として、今後出てくると思う。アウトプットをインクルーシブな博物館を目指す、と設定するのはあると思う。
- ・ 事例として、奈良県で「障がいのある人と仕事を作る」というプロジェクトを長期に渡って行っている。デジタルデータをもとに創造物を制作する技術であるデジタルファブリケーションを利用して障がいのある方たちと新しく商品開発をしていくということを福祉事業所と連携してやっていた。スペシャルな技術ではなくてもできるような商品を考えて。実際仕事として機能するようになっている。データを作ると、いろいろな福祉施設と共同できるので、仕事のプロセスの分業ということもできている。
- ・ 「見る」という機能から「感じる」という機能を作っていくことが大事。博物館の強みには、有形無形問わず実物があること、触れられることが大きい。どれだけ県内の方が博物館に触れているかということが重要。それは、資料もそうだし、そこに行くこと自体もそう。
- ・ 数字が重要。県内の方が年間5回位行っている場所になるだけで大いに盛り上がる。インクルーシブな博物館を目指すという事を考えた場合、空間の問題と人でケアできる問題というものがある。それぞれ問題意識を分けながら考えていくこと必要がある。
- ・ 大事なことは、対話して設計できる建築家をちゃんと選定するということ、資料を並べるだけでなく展示体験をきちんとデザインする視点を持つこと

と、博物館内外で子供たちに開いていくプログラムをきちんと作っていくことである。

- ・ デザイナーやシェフの方を招へいし、その土地に滞在しながら活動するレジデンスプログラムを始めてみることも面白い。研究して、魅力を再発見していくということを、山形にいる優秀なシェフやデザイナーなどの人材に今から10年間かけてやってもらうことで関係性を築いていく事が良い。

【意見交換】

- ・ 今日はすごく楽しい議論になった。障がいのある方との協働について、その人にとって社会が障がいを起こしている可能性があるという考え方があ
る。つまり社会と人の両方が解決を目指す必要がある。博物館の中でも重要なこと。博物館を建物として考えるか、デザインとして考えるか大きな視点の
違いがある。そこは、行政が決めるのではなく、コミュニティの発想を踏
まえて、一般の方と意見交換をしながら、ミュージアムをデザインしていく
事がこれからは重要。博物館という言葉をやめてミュージアムと呼ぶのが良
いと思う。博物館というと、どうしても建物にこだわってしまうが、建物と
いうのは一つの手段であって、そこにある機能が広がっていくという考え
方をした方が良い。
- ・ アウトカムの話では、入館者数で評価される事が多いので、もう少し考
えた方が良い。例えば人々の幸福、well-being（ウェルビーイング）などを指
標として使えないかと考えている。入館者数だけじゃないやり方にしてい
かないと社会全体に影響を与えるような博物館にならないのではない
か。この10年間に新しい博物館像を作りながら、新しい取組みをしていくのが
良い。
- ・ 研究の話では、学芸員という一つの人材がある。高度な人材を社会の様
々なところで共有していくという考え方があ。場合によっては、大学教授
やデザイナーなどの専門人材を博物館と共有していく柔軟な発想もある
だろ
う。
- ・ 日本博物館協会が発行する博物館研究という雑誌の編集委員を務めて
いる。令和5年1月号は連携がテーマになっている。参考にさせていただ
きたい。
- ・ 一見、県立博物館にはできないかと思えることでも、すでにやっている
事がある。県立博物館だから「こういうことができない」ということは
実はもう無い。山梨県立博物館、島根県立古代出雲歴史博物館、九州
国立博物館などの事例がある。自由な発想で色々なことを連携してや
っていくという事が形になっている。山形県と学芸員や資料の専門家、
連携相手とじっくり話

し合って実現していく事が重要。しかし、一朝一夕にはできない。時間をかけて、一生懸命話し合って、歴史的な背景を調べたり、山形の植物などの調査を行ったりする必要がある。行って体験してもらうには、道の整備、ガイドの養成など、やる事がたくさんある。できないことはないが実際に何かをやるとなるとかなりプロセスとしては大変。何をやるかということをしつくり考える、連携相手としつくり時間を重ねていろいろと準備していくという事が大事。

- ・ 柔軟な発想で皆さんと一緒に話し合いを重ねて、よりもっと自由なことが出来るという可能性を感じた。
- ・ 話し合いが進むにつれて、緊張が解け、ときめきとひらめきが湧いてきた。
米沢市南原地区では、9月に「ミナミハラアートウォーク」を開催している。私も個人参加している。有名な音楽家、若いアーティスト、イラストレーター、ピアニスト、日本画家などがこの地域で期間を決めて、地区全体を美術館に見立ててアートウォークというイベントを行っている。まさにこれがオープンエアミュージアム（野外博物館）である。
- ・ 山形県は自然や食が豊かであるので博物館と連携していくことで素晴らしい事ができるのではないかと思う。山形県の可能性は大きく広がると思う。食文化の共有、参加型のワークショップ、地元の若い作家との協働、国際交流、子育て世代や地域の方も楽しめて、暮らしも表現できる、そんなことが簡単にできる。本当に山形県は素晴らしいところなので、新博物館もワクワクすることがたくさん生まれる場所になると思う。
- ・ 高齢者は増えているが、健康で元気なおじいちゃん・おばあちゃんも多くいると感じている。そのようなおばあちゃんの手仕事や伝統工芸は何時間でも見ていられる。ただ見ているだけでたまらない充実感や感動を与えることがあるので紹介してほしい。後継者を募集している伝統工芸などにはハローワークで触れ合えない。そのようなことをやってみたいと思う若者がいても、相談先が分からないという事は多いと思う。まずは、どういうことをやっているのかを知る機会を作ったり、ライブで見られたら良いと思う。
- ・ 民謡なども、仲間が集って三味線や歌の練習をしたり教えたりという雰囲気自体が良い。休憩時間には、おばあちゃん達が自家製の漬物を広げて、手の平で取り分けて、互いに褒めあうという雰囲気がとても素敵。
- ・ 山形県内の企業が参加し、どのような仕事を行っているのか実演したり、農家の冬仕事と夏仕事を紹介するなどすることで、関係人口・移住者の増加も見込めるのではないか。そのような事を知ることができる・見ることがで

きる「のぞき部屋」のような空間があったら面白い。

- 多様な意見が出てきている。人材、コミュニティ、交流、マーケットなどがキーワードなのかと思う。
- これらを実現するためには、実験ができる場所やプログラムがあるのが良いと考える。そこでやってみて、やったこと自体が経験に繋がっていく。オンラインでもオフラインでもスペースを用意しておいて、いろんな方が実験として関われば良い。民間企業、地域の方々、子ども達などが、そこは何をしてもいい場所なんだ、という形で発信していけたら良い。実験場にもデジタル化を進めていくのが良い。世界と繋がるとか、普段公開できないものをバーチャルを使って展示するなど面白い実験をたくさん行い、多種多様な人々がオンライン、オフライン問わず集まる場所があると、今までにない指標を設けることができるのではないかな。
- 県内4つの地域ごとに分けて考えてもいいのかと思った。それぞれの地域でできるフィールドワークを打ち出して、すべての場所を回るための経費を補助する取組みなどがあると面白い。
- アウトカムについては、数値的な目標を考えると、アウトカムの段階で二段階、三段階のものを作って最終段階に well-being (ウェルビーイング) のようなものを設定することが重要だと考える。また、部局を横断的にすることは行政的にすごく重要な事である。佐賀県に事例がある。
- チャレンジしていく場として、「ヤマハクラボ」などと名前をつけてプロジェクト化していくのが面白い。たくさん出てきたアイデアを一度やってみる、どんどんチャレンジしていくことが面白い。
- たくさんのアイデアについて、すでに事例もある。博物館において伝統工芸や伝統芸能、農業体験ができる事例は千葉県にある。
- ひとつの巨大な博物館を作ってすべての機能を担わせるというのは現実的ではない。これからの社会や経済状況では、持続可能がキーワードになる。山形県には、すでに山形県産業科学館が霞城セントラルの中にあって企業が出展している。そういうのを繋げて、アクセスしやすいような形にしていくこともできる。
- 収蔵品を見せることについては、九州国立博物館、福井県立歴史博物館が行っている。やり方はたくさんある。

- 県立博物館だからできないということはない、と聞いて出せる意見の幅が広がったと感じている。
- 大学との連携を是非して欲しい。東北芸術工科大学には美術やデザイン学科など多くの学科がある。文化財の保護という点では、文化財保存修復学科がある。学校内にある保存修復研究センターの活用は地域文化財を守っていくことにも役立つ。
- また、機能を見せていくという点では、修復スタジオを併設して、どういう風に作品が直されていくのか、また、身近にあるものが壊れたり劣化するとどういう状態になるのかということ子ども達に興味を持って見てもらう事は面白い。デザインでは、グラフィックデザイン学科があるので、CGやプロジェクションマッピング作成などの協力ができる。
- 霞城公園内の山形市郷土館には、古い医療器具が展示してある。例えば山形大学医学部と連携し、医療技術の進歩や器具の対比が見られると面白い。